

地域のパートナー「学生」を まちづくりに生かす



まつもと みねお
松本 嶺男
いとしま
糸島市長 (福岡県)



ますおか きんや
増岡 錦也
せと
瀬戸市長 (愛知県)



たかはし やすし
高橋 靖
みと
水戸市長 (茨城県)



まきの ひゃくお
牧野 百男
さばえ
鯖江市長 (福井県)

司会・コーディネーター

いのうえ しげる
井上 繁

常磐大学コミュニティ振興学部教授

今や大学は都市において、重要な地域資源であり、パートナーです。全国の都市自治体では、とりわけ、まちづくりの担い手である学生に対し、地域活動への参画機会を提供したり、学生の意見を市政運営に活用するなどの取り組みが進められています。

座談会では、学生をまちづくりに生かす取り組みを積極的に展開する牧野百男・鯖江市長、高橋靖・水戸市長、増岡錦也・瀬戸市長、松本嶺男・糸島市長にお集まりいただき、取り組みの経緯や内容、具体的な仕組みづくりとその効果などについてお話しいただきました。

(本文中の役職名・敬称は一部省略しています)

平成16年の福井豪雨での
学生ボランティアをきっかけに、
「学生との連携・協働事業」を
進めています。



牧野 百男
鯖江市長(福井県)

進む、行政と学生との連携事業

井上 大学教員の立場から申し上げると、近年は行政と大学の関係がより身近になったと感じています。従来は、市長や職員を大学に招いて講義をしていただいたり、教員が行政の委員会や審議会の委員として意見を申し上げる。そういう関係が一般的でしたが、最近は学生も地域のパートナーとして、その力を生かし、積極的に市

い評価を受けています。

地域との連携においても、学生には主体的にかかわってもらっています。特に、防災分野では、研修や勉強会を受けるだけでなく、より分かりやすく、訴求力のある「防災マップ」の作成なども担ってくれているんです。頼もしい限りです。

増岡 瀬戸市では、平成14年ごろから、空き店舗を利用してカフェを運営するなど、学生が主体となって商店街の活性化につながる運動が活発化しました。それが大きな成果をおさめ、一躍学生の力が注目されるようになったんです。そのころは、市内の尾張瀬戸駅前に公共施設を集約化したビルの建設計画が持ち上がった時期だったのですが、そうした学生の力をまちづくりに活用するために、周囲の地域の5大学が加盟する「大学コンソーシアム」を設立し、ここをその拠点にしようとの機運が盛り上がりました。

この構想は、さまざまな関係者の後押しもあり、平成17年に実現しましたが、それ以来、さまざまな地域交流事業が行われるようになりました。その一つが、まちの住民を対象にした「IT講習会」。学生が講師となって住民たちにコンピュータやインターネットの使い方を教えるコンソーシアム恒例の講習会ですが、予約開始日には予定定員をオーバーするほどの人気を博しています。さらに毎年、6月には加盟大学による「合同大学祭」を開催するのですが、学生同士の交流が生まれるだけでなく、まち全体に活気をもたらしてくれています。

平成17年からは大学と行政が協働して調査や研究を行う「まちづくり施策協働プログラム」も実施。これまで50近いプログラムが行われ、その成果は市政に生かされています。うれしいこ

政運営やまちづくりに携わる例が増えています。それでは、まず、それぞれの都市で学生の力を生かしたまちづくりを展開された経緯や、その取り組み内容についてお話しいただきたいと思っています。

牧野 鯖江市内にはそもそも大学はありません。にもかかわらず、本市では学生をまちづくりのパートナーと位置付け、平成19年度から「学生との連携・協働事業」を進めています。平成24年度は16大学450人の学生が活動を行いました。きっかけは平成16年の福井豪雨でした。甚大な被害を受けた河和田地区で、多くの学生ボランティアが復旧・復興活動に携わってくれたのです。

実は、この河和田地区は、およそ1500年の歴史がある越前漆器の産地。この環境に改めて着目したのが、京都精華大学の学生たちでした。同大学には芸術やデザインを学ぶ学生が多く、河和田地区は、そんな彼らの目に魅力的な活動フィールドと映ったのでしよう。早速、平成17年には彼らが中心となって、古民家で共同生活しながらの滞在型アートイベント「河和田アートキャンプ」が開催されました。当初は復興支援を目的とした活動でしたが、次第に活動の軸が地域づくりへと移りながら毎年実施され、今では地域に欠かせないイベントとして定着しています。

この学生イベントを皮切りに、私たち行政も地域活性化プランコンテストの開催支援や、学生から受け付けた提案事業を具現化したり、学生の活動拠点を開設したりと、連携・協働事業を本格化したほか、明治大学と連携協定も締結しました。明治大学の学生に「鯖江ブランド」の

とに、最近では、観光開発にも参画してくれているんですよ。学生たちの視点から、まちの資源に光を当てることで、これまでにない観光施策の新たな切り口が見えてきています。

松本 糸島市は、平成22年1月に前原市、二丈町、志摩町が合併して誕生した市で、九州大学を生かした地域づくりを進めています。その転

学生が活動しやすい
「フィールド」をいかにつくるかを重視。その上でより具体的な
テーマを提示し、学生ならではの
アイデアを期待しています。



高橋 靖
水戸市長(茨城県)

創造をテーマにまちづくり施策を提案していただくプロジェクトも行われていますし、市内でインターンシップを行う金沢大学の学生からも、まちづくりの提案をいただいています。

高橋 行政と大学の相互の人的・物的資源を最大限に生かすことで、まちのにぎわいを確保したい、学生の育成も図っていききたい。そうした目的のもとに、水戸市では、茨城大学・常磐大学と包括的連携協定を結んで以来、学生の力を生かしたまちづくりを展開しています。

学生には幼稚園や小学校など教育現場での支援をはじめ、さまざまな協働事業に携わってもらっていますが、その中で私たちが最も重視しているのは、いかに学生が活動しやすい「フィールド」をつくるかということです。それに向けて、私たち行政も学生に対して政策提言の場や私と直接、まちづくりについて話し合う機会を設けたり、地域や産業界との間に入ってコーディネート役を務めるなど、忙しく立ち回っています。



そのかいあって、産学連携なども非常に進んでいます。例えば常磐大学の学生と菓子メーカーがコラボして「ぶよもち」というお菓子を開発したところ、農林水産省食料産業局長賞を受賞するほど、高

機となったのは、私が市長に就任した平成17年に、九州大学が本市と福岡市にまたがる「伊都キャンパス」へ移転を始めたことでした。以来、あらゆる分野で九州大学との連携・交流を図ることになり、平成22年には、連携協定も締結しました。合併後に策定した市の長期総合計画においても、本市の3つの重点プロジェクトの一つに「九州大学を生かした地域づくりプロジェクト」を位置付けています。既に地元産のラーメン用の小麦を生かしたラーメンの開発など連携研究の実用化も進んでいます。

そうした中で、近年は学生と市民との交流も活発になりました。これまで農業や教育分野での連携、留学生と小学校区との交流など、100を超える連携・交流事業を実施中です。山笠など地域のお祭りにも、学生たちが積極的に参加してくれています。

さらに、地域貢献を目的にした学生サークルも続々誕生しています。その一つが、市内でのあらゆる活動を通して、糸島の活性化と自己成長を図る「ITOP」という学生団体です。現在100人を超える大所帯ですが、彼らが主体となって、全国から学生を募集し、4泊5日で市民、企業、行政とともに魅力的な活性化プランを考える「地域活性化プランコンテスト」を毎年、開催しています。既に、第3回コンテストの最優秀プラン「商店街の空き店舗を活用した大学生・留学生によるカフェの運営」が実現化されるなど、まちの活性化に大きく貢献しています。

学生が参画しやすい仕組みをいかに構築するか

井上 地域の特性や置かれた状況はそれぞれ異



松本 嶺男
糸島市長（福岡県）

キャンパス移転を機に、九州大学との連携を推進。九州大学を生かした地域づくりは、わが市の重点プロジェクトです。

牧野 鯖江市には漆器や眼鏡産業をはじめ、伝

れ自体、教室では学べない経験や知識を得られる実践活動であるし、学生の潜在力を引き出す契機にもなります。特に地方の大学には地域貢献や地域社会との交流が期待されている中で行政や地域社会との協働は重要な責務になっていきます。その一方で行政の側から見れば、どのような効果が生まれているのか、皆さんにお話しただきたいと思っています。

松本 取り組みを続けていると、次第に住民たちの意識も変化してくるものです。当初は、いくら私が九州大学を生かしたまちづくりを推進しようと思っても、「そんなことで、市が活性化するはずがない」といった、否定的な意見が大半でしたが、実際に若者がまちで活動するようになると、まちに活気が生まれますし、住民たちもさまざまな面で恩恵を受ける。雰囲気もずいぶん変わってきました。

牧野 地方都市は、普段外部の方々との交流を持つことが少ないため、閉鎖的な気質が少なからずあるものですが、鯖江市は学生たちとの交流を繰り返す中で、少しずつ住民の中にもそのような気持ち芽生えてきたようです。学生が閉鎖性に風穴を開けてくれたのだと思います。

高橋 行政が主体となって、学生が参画しやすい環境をつくることも重要でしょう。政策提言を求めるにしても、「中心市街地のにぎわいについて考えてください」というように、より具

体的なテーマを提示することが大事だと思います。とにかく知恵をくださいというスタンスでは、学生も戸惑ってしまいますからね。テーマや目的、われわれの要望を明確に大学や学生に伝える。これも協働事業を行う上で欠かせない要素です。

学生の熱意のみに依存すると、活動の衰退の可能性も。継続させるためにも、予算の確保に努めています。



増岡 錦也
瀬戸市長（愛知県）

松本 それに加えて、連携や協働を活発にする

伝統的な産業が息づいているし、古い町並みも残っています。しかし、そうした宝をどのように組み合わせ、より磨きを掛けていくか。これまで、住民たちにはそうしたアイデアがなかなか浮かばなかったのも事実です。しかし、学生たちは古いものを生かす、新しいアイデアを持つています。そのようなアイデアを具現化することで、着実にまちに活力が生まれるんです。

高橋 同感です。学生たちは私たちには持ち得ない価値観やライフスタイルを持っています。そうした若者特有の要素を、施策に反映することは大きなことですね。実際、水戸市でも、数自体は多くないものの、学生から政策提言を受け、実行に移した事業があります。確実にプラスの効果が出ています。水戸市の地場産業の販売促進のポスターやステッカーに掲載されている「水戸美味（みとうま）」というキャッチコピーは、学生たちが考案したものです。参加店舗を募集したところ、24店舗が参加するなど、産業界とも連携し、活性化につながっています。

松本 地域の身近な問題をテーマとする研究が進むことも大学の重要な地域貢献です。実際、これまでに農業のIoT化、小水力発電の実用化、養豚の糞尿問題の解決、イノシシ肉の商品化などの研究が進められています。その成果は地域にフィードバックされています。地域の課題解決につながるわけですから、住民も効果を実感しているんです。

増岡 「大学コンソーシアムせと」でも、大学教員・学生と市担当課との協働により、まちの課題をテーマにしたプロジェクトを展開しています。これまでに発達障害の子どもたちへの支援、異年齢保育の効果検証、環境基本計画策定

には、財政支援も欠かせないでしょう。糸島市では、平成22年度から、地域課題の解決や地域資源の掘り起こしなどにつながる大学の研究については1件当たり100万円を助成しています。毎年約10件採択しますから1000万円が必要ですが、予算も確保していますし、学生に対する活動資金を用意しています。私どもが提供できるのは、「快適研究空間」と「快適生活空間」。どうぞご利用してくださいというスタンスですが、それが大学の地域貢献の意識を高めているのです。

増岡 当然のことですが、学生はどんなに地域活動に熱心でも、4年たてば卒業してしまいます。その熱意だけに依存してしまえば、活動が途絶えてしまう可能性がある。だからこそ、活動を継続させる仕組みが必要です。その一つが大学コンソーシアムという専門組織の存在です。さらに言えば、財政的基盤も重要だと思います。瀬戸市としても、十分に予算を確保しています。これが教員や学生のモチベーションを向上させています。実際、予算額が十分だと、「来年はこれをやる」と、前向きな意欲が出てくるんです。

牧野 鯖江市でも、学生滞在型まちづくり活動支援として、鯖江市に施策提案を行うフィードバック実習や、スポーツ・文化サークルなどの合宿、さらにはゼミ合宿に対しても1人1泊1000円〜1500円の宿泊補助を行っています。これにより、さらに鯖江市をフィールドに活動する学生が増えることを期待しています。

行政側から見た連携・共同事業の効果とは

井上 学生が地域で協働事業を行うことは、そ



のお手伝いなど、さまざまな問題を扱ってきましたが、市の施策に数多く生かされています。

牧野 わがまちには、もう一つ、嬉しい効果があるんです。それは市内で地域活動を行っていた学生たちの中から、新住民が生まれたこと。ただ数は少ないものの、実際に9人が住所変更してくれました。中には地元への伝統産業に就職し、結婚した方もいます。確実に地域に元気をもたらしてくれています。

松本 市の職員の採用試験に、九州大学学生が受験してくれるようになったことも大きな効果ですね。今では採用職員の半分ほどは九州大学卒業生。優秀な人材の確保につながっています。

現在の課題とこれからの展望

井上 それでは最後に、学生との連携・協働を行う上での現在の課題と、これからの抱負や展望についてお聞かせください。

牧野 今後の課題といえば、河和田地区のさらなる受け入れ体制の充実です。現在は、古民家を宿泊所にしてはいますが、多いときには1日に100人の学生が訪れますから、これでは足りません。温泉施設に泊まってもらうなど、急場をしのいでいますが、ぜひもう1軒拠点を設け



井上 繁
(常磐大学コミュニティ振興学部教授)

たいなと考えています。さらに、行政として、これまで学生のアイデアの具現化に庁内を挙げて取り組んできたものの、職員の意識改革も含め、さらにそれを追求していきたいと考えています。

高橋 行政として「こういう調査、研究をしてほしい」と大学側に提案をしても、教員によって温度差もありますから、こちらが思ったような成果が出ないこともありますよね。そうした中で、より重要性が増しているのが大学側の窓口となる「地域連携センター」の存在だと思えます。行政も地域連携センターに明確に要望を伝える。センターもこちらの要望を受け止めて、内部で調整やコーディネート機能を発揮していただく。センターを媒介に、適切なコミュニケーションが取れば、お互いにメリットが生まれるし、学生もどんどん地域の中に出て、活発に活動するようになる。ひいてはそれが水戸市の将来を担う人材の育成にもつながっていくのだと思います。

今年、新たに日立市にある茨城キリスト教大学とも連携協定を結びましたので、より若者の意見を活用し、行政の政策の幅を増やしてい

きたいと考えています。課題としている中心市街地の活性化について、積極的に学生からの意見を求めていると思います。

松本 高橋市長がおっしゃるように、大学と行政、双方のコミュニケーションをいかに充実させるかという点は極めて重要です。糸島市では、九州大学に職員を派遣しているほか、庁内には専門の課を設け、九州大学OBの方を嘱託職員として迎えています。これにより、お互いの意思疎通は十分に行うことができます。

今後の目標は、九州大学の学生や教職員の定住の促進です。現在のところ、糸島市内から九州大学へ通勤・通学している割合は全体の1割程度。大半が福岡市から通っています。確かに、福岡市は娯楽施設も多いし、生活の利便性も高い。それに対抗するためにも、低家賃のアパルトの斡旋、空き家を改修したシェアハウスの補助、コミュニティバスの充実、自転車購入者への補助など、できるかぎりの施策を進めて、学生や教職員が住みやすい環境をつくっていきたくです。

増岡 グローバル人材の育成が叫ばれています。小学校など早いうちから国際教育、英語教育を行うことが大切だと思います。そうした分野にも、学生の力を大いに借りたいですね。学生に活躍の場を与えることで、われわれにもメリットがあるし、学生も貴重な機会を持つ。今以上にウィンウィンの関係を構築できればと思います。

井上 お話を伺って、皆さんは若者の価値観を大事にし、そのアイデアを市政に生かしているという強い意欲をお持ちと感じました。ただ、学生はいくら熱心に地域活動に取り組んで

も、いずれは卒業します。活動を担う学生団体などのメンバーも入れ替わる。だからこそ、そのノウハウや仕組みを継承していくことが重要ですが、各都市はそれがうまくいっていますね。それが成功の秘けつではないかと考えた次第です。学生が地域の中で活動することは、学生にとっても貴重な機会ですし、地域の中で世代間交流が加速するきっかけにもなります。これからも学生を生かしたまちづくりを、当事者である学生や行政はもとより、商店街や自治会、町内会などさまざまな主体とともに展開されることを願っています。本日はどうもありがとうございました。

(平成25年6月5日、全国都市会館にて実施)
本コーナーは隔月掲載となります。次回は9月号に掲載予定です。

